



杏雨書屋(きょううしょおく)は大阪市にある公益財団法人武田科学振興財団が運営する図書資料館。国宝や重要文化財のほか、国内でもトップクラスの古医書を収蔵しています。このコーナーでは先人が古医書に残した現代に通じるメッセージを、小曾戸先生に紐解いていただきます。2013年10月、杏雨書屋は大阪市中央区道修町に移転しました。

## 其ノ七 本草図譜 一杜仲一

案内人◇小曾戸 洋(北里大学東洋医学総合研究所 医史学研究部 部長)

### 杜仲は元気の損傷を補う生薬

フロロミンエースの構成生薬である杜仲は、身体内の元気を補う滋養・強壯薬として古くから用いられてきました。『神農本草経』の上品に収載され、「腰脊の痛みを治し、中を補い、精気を益し、筋骨を堅くし、志(精神力)を強くし、陰下痒湿(陰部の湿りと痒み)・小便余瀝(尿失禁)を除く」と、その効果がうたわれています。中国甘肅省の漢代の墓から出土した木簡の処方集(武威医簡)にも、「内傷」(元気の損傷)を補う薬として配合されています。

日本への伝来は従来、奈良平安時代以降といわれてきましたが、藤原京跡出土の木簡(694~710年)に「杜仲十斤」と書かれた荷札が発見されたので、飛鳥時代に日本で用いられたことが明らかになりました。写真は『本草図譜』に描かれた杜仲の図です。

『本草図譜』は文政11年(1828)に成った江戸時代最大の植物図鑑で、著者は岩崎灌園(1786~1842)。灌園は三河の出身で、名は常止、通称は源三。有名な本草学者・小野蘭山の最晩年の弟子です。『本草図譜』は全95冊の彩色図譜ですから印刷出版は困難を極めました。全冊の刊行が終了したのは完成から100年近くもあとの大正11年(1922)のことでした。杜仲は巻79の喬木(高木)部に載っています。



杏雨書屋蔵『本草図譜』杜仲の図(1920年・木版多色刷)

### 杜仲を服用した人物が仙人になった!?

杜仲の基原植物は、落葉高木のトチュウで、樹皮を乾燥したものを薬用とします。「杜仲」の名称の由来について、明の李時珍は『本草綱目』で、「杜仲という人がこれを服用して仙人になったから」といっています。なるほど杜仲とはいかにも人名らしくも思えますが、根拠は薄弱です。ほかに、杜仲は補中の最たる薬であり、「杜寒中虚」(ふさがって体内が虚した状態)に効果があるからという説もあります。

日本では古くは「まゆみ」「はひまゆみ」と呼ばれました。「まゆみ」は「真弓」のこと。高く直立することから。「はひまゆみ」は「這い真弓」のこと。これは曲がったものを指すといえます。



杜仲は『神農本草経』の上品で、効力抜群の補剤です。

小曾戸 洋(こそと ひろし)

日本医史学会理事長、杏雨書屋副館長、上海中医薬大学客員教授。1950年山口県下関で小曾戸薬局を営む小曾戸丈夫氏の長男として生まれる。宋の時代に散逸した貴重書『小品方』の発見や馬王堆(まおうたい)という中国湖南省にある紀元前2世紀の遺跡で発見された医書の解説により、中国でも医史学研究で著名な成果をあげる。主な著書『日本漢方典籍辞典』(大修館書店)、『中国医学古典と日本』(瑞書房)、『漢方の歴史』(大修館書店あじあボックス)。